

王家の石棺と琉球の葬法

玉陵において王族の遺体が保存される方法は、琉球諸島に特有の伝統的な葬儀の習慣を例示しています。琉球の土着信仰では、尊厳ある方法で故人の骨を清め、維持することを非常に重要視しています。これは特に、その魂が国全体を守るとされている王および王族に当てはまります。葬儀は、最初に故人の身体を自然に分解させる風葬が中心になっています。墓陵を建てるのが一般的になる以前は、風葬は通常遺体を屋外または洞窟に置くことで行われました。この風習は一部の辺境ではまだ続いています。主に中国から伝わった墓陵建築の導入に伴い、墓陵には玉陵に見られるような遺体を分解させるための特別な墓室が設けられました。

遺体が十分に分解されると、「骨の浄化」を意味する洗骨と呼ばれる再埋葬の儀式が行われます。骨から残った肉を取り除いた後、酒で洗い、石や陶器の棺の中に注意深く配置します。玉陵では、この役目は家族内の女性に委ねられましたが、作業の指示をするのは男性でした。男性はしばしば簡単に形式的な指示を出し、その場を後にしたそうです。

厨子（王家の石棺）は通常、御殿型（うどうんがた）と呼ばれる家屋や宮殿のミニチュアの形状をしています。これらには手の込んだレリーフと色の塗られた装飾がほどこされており、蓋は瓦屋根の形です。尚円王とその娘、そして未だ身分の判明しない人物 1 名の骨壺は暗い色の火成岩である輝緑岩から彫られています。その後、1712 年までの骨壺には琉球石灰岩が使われました。これらの骨壺には、地藏菩薩と呼ばれる仏教の守護神の姿や他の仏教の装飾、そして碑文が描かれていました。18 世紀半ばには、詳細な彫刻のレリーフで装飾され、豊かな彩色が施された陶製の骨壺が使われるようになりました。同様の骨壺は、今日でも沖縄諸島全域で好まれています。玉陵にある王族の骨壺のいくつかは、丸い瓶の上に円錐形の蓋が付いた形をしており、その見た目が坊主頭に似ていることから、坊主型（ぼーじゃーがた）と呼ばれています。

20 世紀の間、衛生上の懸念のため、沖縄での再埋葬の風習は推奨されませんでした。現在では、日本の他の地域と同様、故人の遺体は通常火葬されています。